

研修視察報告（奥尻島・せたな町）

青 沼 進 二

平成 23 年 10 月 25 日羽田を出発し奥尻島、せたな町へ行く予定でした。奥尻島の視察目的は、平成 5 年 7 月に突然襲った「北海道南西沖地震」における被害状況とこの災害の復旧・復興がいかにか大規模かつ重要であったかを検証し、平成 10 年 3 月に完全復興を宣言し、現在の震災の取り組みを知ることと、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災をどのように捉えているのかを聴取することでした。あいにく 10 月 25 日は発達した低気圧通過のために、江差港から出航するフェリーが欠航したため、急きょバスの中で全員協議会を開き奥尻島視察を中止にしました。

急な出来事のために江差港においては宿泊先が手当て出来ないこともあり、函館視察へと変更しました。この北海道南西沖地震において函館港も津波の被害を受け、函館市場は海水につかり店の物等が流されたということでした。大きな被害はなかったもののやはり、津波の怖さを実感しているとのことでした。

次の視察地、せたな町は奥尻島の真向かいにあり、平成 17 年に大成町・北檜山町・瀬棚町の 3 町が合併して誕生した町です。この町にある洋上風力発電は、合併前に瀬棚港マリプロジェクトを立ち上げて、瀬棚港の沖に防波堤（多目的防波堤）を設置し、その内側に 2 基の洋上風力発電を建てたものです。

この洋上での風力発電は日本で初めてのことで、昭和 60 年に運輸省港湾局のケーススタディの指定を受けスタートしました。

平成 10 年にプロジェクトの見直しがなされ、物流及び産業を核とした地域振興、フェリーターミナルを中心とした広域交流の拠点整備等、「洋上発電と海洋深層水」構想を立て、その後、洋上風力発電導入調査に入り、せたな町洋上風力発電事業は、平成 14 年度「地域新エネルギー導入促進事業」に採択され建設を開始しました。

町の気候は対馬海流の影響を受けて比較的温暖ですが、冬は北西の風が強く、夏は「やませ」と呼ばれる東風が強く吹き、道内有数の強風地帯であることから風力発電向きであり、平成 16 年に完成し運転を開始しています。

発電機器等の概要は次のとおりです。

ロータ(羽)の長さ	47.0メートル
全体の高さ	64.2メートル
定格出力	600kw×2基
年平均風速	7.9m/秒
製造国	デンマーク
電力用途	北海道電力に売電



2基合わせての年間発電量は約4200MWhで、これは一般家庭約1000世帯分の年間消費量に相当します。発電した電力は海底ケーブルで送電され、風車の基礎部にはアワビやウニの餌となる昆布を養殖しています。発電した電力はすべて北海道電力に売り、建設費の返済に充てています。せたな町の各家庭の電気料金は安くなりません。建設費の償還期間は約10年と見ているそうです。

せたな町は、その他に瀬棚臨海風力発電所に6基(出力1200kw/基)、瀬棚マリンタウン風力発電所に2基(出力1200kw/基)があり、「(株)エコパワー」が運営しています。

せたな町も北海道南西沖地震に見舞われています。視察中に案内され新たに整備された津波・高潮対策の防潮堤、川の出口の津波の侵入を防ぐ水門や高台にすぐ行けるようにした遊歩道を見学しました。地震の時は堤防を越えた津波が、テーブルなどの家具の何もかもと一緒に流され、外に放り出されたということでした。やはり地震・津波に対する恐怖感は未だに残っているようです。

新島村の電力は東京電力頼みですが、これから起きるであろう大震災に備えて、新島村の防災計画の更なる見直しが肝要かと思えます。また、これからの時代は自然エネルギーに向かうものと確信しています。他島では試験的に自然エネルギーの活用を模索しています。新島村においても、防災の面から自然エネルギーの重要性に目を向けていくべきではないでしょうか。



「日本海からせたな町に吹く強い風をエネルギーに変えることはできないだろうか？」

そんなひとつの夢から このプロジェクトは出発しました。

「子どもたちの未来に美しい地球を残すため、環境にできるだけ負担をかけないクリーン・エネルギーを」という願いが根底にありました。

せたな町ホームページより